

おぼろいっすの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

「次の100年」に向かう 希望を紡ぐ

平塚らいてうの会会長 米田佐代子



夏の会の柳川慶子さん（左から3人目）、高田敏江さん、長内美那子さんと地元長小学校6年生4人（両側）による「夏の雲は忘れない」抄—ヒロシマ・ナガサキ1945—の朗読劇。

盛会だった記念行事の数々

『青鞥』創刊100周年の9月はなんと忙しかったことでしょう。らいてうの会では9月4日にらいてうの家と庭を会場に、「記念祝祭」の野外

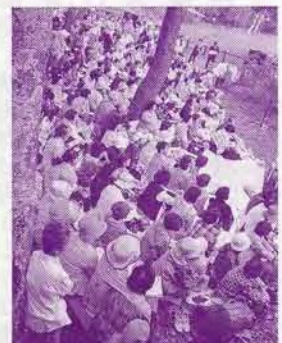
コンサートをひらきました。東京でイベントを、という案もありましたが、かつてらいてうが「野の花、野の鳥と親しみたい」と求めたこの地にらいてうの家を建設してまる5年、らいてう個人の記念だけではなく「らいてうのこころざし」に惹かれて集まったみんなの思いがぎゅっと詰まっただけでなく、当日は悪天候でしたが心配していた雨にはならず、県内はもとより全国から駆けつけた参加者と、地元の子どもたちも交えた出演者を合わせると400人を越える参加がありました。マスコミもこぞって「『青鞥』100周年」をとりあげ、らいてうの家も大きく紹介されました。

このほかに東京では、3日に「いま、青鞥を生きる」つどい、8日に日仏会館でシンポジウムがあったほか、10日はわが会も協力して東京の日本女子大を会場に、『青鞥』100周年記念国際シンポジウム「今、世界が読む『青鞥』」が開かれ、第二会場を用意するほどの盛況でした。

今こそ生きる百年のメッセージ

多彩な取り組みのなかで浮かび上がってきたのは、100年前『青鞥』の女性たちが悩み、もがきながら発したメッセージが少しも色あせていな

いことでした。だからこそイベントに大勢の方が参加してくださったのだと思います。



庭いっぱい参加者のみなさん

その訴えとは何だったのでしょか。50年前、当時75歳のらいてうは『青鞥』創刊50周年にあたって当時の思いを、「新しい女とあざけられ、ののしられ」ながら、一人びとりが誰の助けもなしに「ただ自分ひとりの力と信念」だけをたよりに「女の一騎うち」をしたのだと書きました。この立場から、らいてうは第一次大戦後「いのちを生む女性の手で平和を」という考えにたどりつき、戦後、誰にも動かされない自分の意思で「核実験・核兵器の廃絶」を訴えつけたのです。「意見がちがっても戦争をなくすために一致点を見つけ、協同を」というのがらいてうの信念でした。生きていたら、きつと原発問題にも「ノー」と言ったにちがいはありません。

明日への希望のために歩こう

平和をねがい、いのちの「無限生成」を信じたらいてう、「生きるとは行動すること」と訴えたらいてう。『青鞥』創刊100周年は、その思いを生かして明日への希望を紡ぎだす新しい一歩です。「次の100年」をめざして少しずつ歩いていきましょう。

『青鞥』創刊百周年記念国際シンポジウム 「今、世界が読む『青鞥』」

9月10日、日本女子大学で国際シンポジウムが開催されました。午前中は、成瀬仁蔵旧居や一時らいてうも住んだ寮跡などを見学。午後のシンポジウムは、らいてうのお孫さんの奥村直史さん、洋さんご夫妻、堀場清子さん、高良留美子さんもみえ、第2会場もほぼ満席という盛況でした。日本女子大学副学長の小谷部育子さん、国際シンポ実行委員会の米田佐代子さん、日本女子大学「新しい女」研究会の岩淵宏子さんのあいさつの後、日本語によるシンポジウムの報告がありました。

クリスティン・レイヴィンさん(仏)は「フランスにおける『青鞥』研究」として、日本のフェミニズムが西洋のフェミニズムとの時間性、特殊な歴史的文化的環境によって、独自の貢献をしたこと、らいてうが子どもを生んでから運動をしていることの意義を考へる。



「青鞥」同人の作品群を翻訳し世界に紹介したジャン・バードレイさん(米)は、「グローバルな視点から見た女性史」と『青鞥』として、海外の「新しい女たち」と互いにどのように影響を及ぼしあ

ったのか、女たちが直接的、間接的に互いの思想や運動を支援しあつたそのあり方を翻訳という視点から考えている。

韓国の近代女性史研究者、申南珠さん(韓)は「朝鮮〈新女性〉の『青鞥』受容の性格と影響」として、日本に留学した朝鮮の新女性たちの女性解放意識の高揚は『青鞥』の発刊に始まる。模倣に始まり、模倣を超えた創造と革新を成し遂げること。「新女子」創刊を準備した「青搭会」とその会員の性格、受容した思想をいかにして自身自身に適用し革新したかを明らかにしたい。

「『青鞥』と日本女子大学校」ヘンスタワードの「水脈」として溝部優実子(日)さんは、『青鞥』創刊号に日本女子大学校同窓生が6割を占めたが、その背景には日本女子大学校の教育力があつたこと、同窓会機関紙『家庭週報』がすでに存在していたこと、寮の存在もまた大きな役割を果たしたことが窺える。そのシスターフッドの水脈を顕在化させたい。

コメンテーターとしてウルリケ・ヴェールさん(独)、露口卓也さん(日)から地球規模での女性の運動を歴史的社会的文脈でとらえる、『青鞥』には若い女性たちが語つた多くの言葉が残されていて、この価値は計り知れないとのコメント。休憩後は質疑応答、補足発言があり、有意義なシンポジウムを終りました。(井上美穂子)

「蚕都上田」バスツアーに総勢50人余
記念イベントの翌日、大型バスで、「蚕都上田」として栄えていた産業都市の名残りを残す施設や

街並みの見学をしました。最初は、いまや全国に1つだけの繊維学部をもつ信州大学。かつての姿そのままに保存活用されている西洋建築の美しい「講堂」、煉瓦造りの「貯蔵庫」の見学でした。説明役は地元建築士の竹内秀夫さん。大学図書館の岩波さんの専門的なお話も大変興味深いものでした。次は、街並み保存活動が積極的な旧北国街道沿いの柳町。古い民家を改造した幾つかの食堂に分かれて、この地ならではの昼食でした。その後は、上塩尻地区に移動。古く立派な屋敷が残された美しい景観の街並みを見学し、「小岩井袖工房」での機織り見学。「藤本蚕業歴史館」で歴史的に価値あるお話をうかがう事ができました。

上田袖の小岩井工房では、お茶をいただき、ゆつたりと作品を眺めお土産も買うことができました。

曇り空の一日でしたが、事故もなく時間どおりに解散することができました。(小林 典子)

【新刊紹介】——奥村直史著(平凡新書) 「平塚らいてう——孫が語る素顔」

「はじめに」で「家庭生活での私人『奥村明』としての祖母と、『平塚らいてう』として社会的に発言し行動する姿とは別物であることに驚き、この二つの姿を含む祖母の全体像を求めて祖母探しが始まった」とあるように、著者が、子どものころに見た祖母の印象やエピソード。反戦、反核、平和、婦人参政権など、家族だからこそ分かるらいてうの素顔を紹介。心理学者でもある著者の分析も興味深い。

寒さ吹きとばす熱演

高原にひびく歌声



歌うこめて情感
西田ミヨ子さん



(上)合唱構成「ぞうれつしゃがやってきた」などをつたう「しなの子どもの幸せと平和を願う合唱団」(下)「コール・フリーデン」による原爆投下の悲劇「過ちは繰り返させませんから」の合唱。(9/4「記念祝祭」野外コンサート)

大震災、原発災害に立ち向かう

「日本母親大会 in 広島」へ実行委として参加

第57回日本母親大会は7月30、31日、初めて広島で開催され、のべ一万六千人が参加しました。

「青鞥」百年の今年、平塚らいてうの会は特別企画「青鞥」百年によせて「平塚らいてうの会は特別核・平和への思いをつないで」をもって、実行委員会に参加し、2日目の分科会を担当。

米田会長が、①「青鞥」が訴えたもの―「わたしはわたし」を自覚し、「青鞥」の女たちは当局やマスコミに対して各自が自分で立ち上がり、立ち向かったこと。②らいてうの平和への思いと行動、そして、世界母親大会を開催することを呼びかけたことなど、話されました。

参加者は男性を含め教室いっぱいになり、非核、平和への思いや地域でのさまざまな取り組みの発言がありました。米田会長は「ここでの話し合いを地域に帰って活かしましょう。みんなであいてうになりました」としめました。

らいてう講座I

小宮山量平さん

煤煙事件の真実と森田草平を語る ②

「森田草平と煤煙事件」というとすぐ「らいてうと草平はどういう関係だったのか？」と聞きたがる人が多いようだが、もっと社会と人間の関係に関心を持たなくてはいけないと思う。

彼は岐阜の地主の息子で、「坊ちゃん」扱いされて育ったが、そういう生活を引きずりながら悪

戦苦闘して問題を起こし、漱石の弟子としては異色といわれた。しかし、漱石の文学的後継者として評価されるべきだと思う。彼は自分について「わたしは、子どもみたいな男だ、直情径行竹を割ったような男だ」といつているが、実際付き合っているとそのとおりだった。

戦後昭和22年ごろ、飯田に疎開していた時に共産党に入党して話題になったが、入党したからといって党におもねる人ではなかった。大ニュースと駆けつけた新聞記者に、「一番大事なのは家族」といつて平気だった。そのころ長野に文化人懇話会というのがあったが、主義主張のちがうものが集まり口論になると、ちゃんちゃんこを着た草平さんがひよいと飛び出してきて、「まあまあ、みなさん、みんなでなかよくやりましょうよ。」と言うんだね。その言葉は僕の心に今でもまざまざと刻まれている。草平さんのこの言葉をみんながスーッと飲み込めずにいるうちに、戦後の日本は植民地政策の分裂政策に引つかかってしまった。

僕とおなじ誕生日の武者小路実篤が横額の賛に「色々ありておもしろし」とよく書いた。その言葉がいつも頭にある。いろいろありておもしろい連中が一つになって力になる、そういう社会に毅然と生きてアメリカの植民地政策を跳ね除けていかなくはない。ホイットマンとマークトウェインのアメリカの復活を願う、家族を大事に、いい市民の生活を大事に、という森田草平のような直情径行な日本人の復活を願っている。
(6月25日に上田駅前エディターズミュージアムで行われたお話のつづき)



五味澄子さん(東京都港区六本木、国際文化会館ロビー)

お茶の水高女でらいてうと

一緒だった目賀田正代さん

今年六月、五味澄子さんにうかがいました。

五味さんは、勝海舟の曾孫にあたる方で、「咸臨丸」乗組員の子孫でつくる咸臨丸子孫の会の活動や出身校である東洋英和女学院の同窓会長、学院の理事などもつとめられた方です。

澄子さんのお母様、目賀田(結婚後は高山)正代さんは、らいてうと同じ明治一九(一八八六)年生まれ、勝海舟の三女逸子さんの三女、そして正代さんのご長女である澄子さんは、一九三三(大正二二)年生まれ、現在八八歳になられます。

らいてうは自伝『元始』女性は大陽であった上』に「菊池さん、足立さん、目賀田さんなどは、テニスの好敵手として、いまも忘れられない人たちです。(中略)目賀田さんは、男爵目賀田種次郎(種太郎の間違いと思われる)の娘で」と書いています。

また、当時本郷駒込曙町に住んでいたらいてうは、お茶の水高女への通学途中「小石川原町から

白山に出て一高(旧制第一高等学校)の前に出る道筋、この道をゆくと、白山付近に住んでいる、目賀田さんによく出会いました。(中略)

わたくしも姉も歩くことが早く、途中で幾人抜いたなどといったは、得意になっていたものでした。目賀田さんもわたくしと同じように足が達者で、背が高く足の長いこの人は、なかなか早足でもありました」とも。らいてうは「ある日父からもっと早く家を出て、ゆっくり歩いて行け」と注意されますが、らいてうたちは早く歩くことそれ自体を楽しんでいたようです。目賀田さんは普段は人力車での通学だったようですが。

澄子さんは「母はリレーのチャンピオンだったといっていましたし、体は大きいほうでした」と話されます。「物集さんとお付き合ひがあり、私が子どものころ、よく物集さんがいらしたし、本をいただいたりもしました」とのこと。青鞥社発起人の物集和子さん、姉で後に、探偵小説を大倉燁子の名前で書いた物集芳子さんでしょうか。

澄子さんは東洋英和女学校を卒業後、東京女子大に入學し、一九四四(昭和一九)年九月繰り上げ卒業。さらに聖路加専門学校の聴講生になられ、戦後は一年ほどCIE(民間情報教育部)で国内新聞の翻訳などをされていたそうです。「CIEの映画部が隣の部屋だったので、当時、映画製作に当たって助言を求められたらいてうさんや山川菊栄さんをお見かけしていました」とのこと。

現在、日本国際ボランティアセンターや国婦振(国際婦人教育振興会、現在は国女振)など多方面にわたり活動され、今も「咸臨丸子孫の会」のメンバーとしてあちこちお出かけになり、お忙しい様子です。

(文責 井上美穂子)

「事務局日誌」

- 6月30日 紀要第4号完成
- 7月7日 第1回常任理事会、紀要4号発送作業
- 7月15日 第2回理事会開催
- 7月24日 森の講座I 笹刈りと学習会 講師・牧幸男さん
- 7月30・31日 日本母親大会参加、特別企画「青鞥」百年によせて企画担当 講師・米田佐代子会長
- 8月7日 あずまや高原自治会懇親会に出席
- 8月7日 9/4イベント実行委員会
- 9月4日 「青鞥」創刊百周年記念祝祭in「らいてうの家」開催
- 9月5日 蚕都上田見学ツアー実施
- 9月10日 「青鞥」創刊百周年記念国際シンポジウム—今、世界が読む「青鞥」—於日本女子大学百年館に出席
- 9月11日 国際シンポのシンポジスト、通訳の方
- 「らいてうの家」に来館
- 9月14日 平塚らいてうの会の未来を考えるプロジェクト会議
- 9月17日 りいてう講座Ⅲ「紫式部からのメッセージ」Ⅳ於「らいてうの家」 講師・宮島満里子さん
- 9月29日 日本母親大会第6回実行委に出席
- ▼会費、ご寄付などのご送金いつもありがとうございます。2011年度会費未納の方は、ご送金よろしく願います。
- 郵貯銀行 振替口座番号 001500-9-553046 NPO平塚らいてうの会